

特 250

246

抱茗文庫第一輯

永平假名清規

青森縣 五戸、抱茗會
(教化文庫係)



始



特250
246

永平假名清規目次



一、正法眼藏重雲堂式（四十歲御作）……………（一）

二、正法眼藏洗淨（同）……………（五）

三、正法眼藏洗面（同）……………（五）

四、正法眼藏示庫院文（四十七歲御作）……………（五）
（年代順ニ依ル）

附錄、大智禪師十二時法語……………（七）



七佛通誠偈

諸 惡 莫 作、
衆 善 奉 行、
自 淨 其 意、
是 諸 佛 教、

一、正法眼藏重雲堂式

一、道心ありて名利をなけすてんひといるへし。いたつらに、まことなからんもの。いるへからず。あやまりていれりとも。かんがへていたすへし。しるへし道心ひそかにこれを。名利たちとこに解脱するものなり。おほよそ大千界のなかに。正嫡の付屬まれなり。わかくにむかしよりいまこれを本源とせん。のちをあはれみて。いまをおもくすへし。

一、堂中の衆は。乳水のごとくに和合して。たがひに道業を一興すへし。いまは。しはらく賢主なりとも。のちにはなく佛祖なるへし。しかあはすなはら。おのおのともにあひかたきにあひて。をこなひかたきをこなふ。まことのおもひをわすることなかれ。これを佛祖の身心といふ。かならず佛となり祖となる。すてに家をはなれ。里をはなれ。雲をたのみ。水をたのみ。身をたすけ。道をたすけむこと。この衆の恩は父母にもすくるへし。父母はしはらく生死のなかの親なり。この衆はなく佛道のともにてあるへし。

一、ありきを。このむへからず。たとひ切要には一月に一度をゆるす。むかしのひと。とをき山にすみ。はるかなるはやしに。をこなふし。人事まれなるのみにあらず。萬縁ともにすつ。鞘光晦跡せしころをならふへし。いまはこれ頭然をはらふときなり。このときをもて。いたつらに世縁にめくらさむなけかさらめや。なけかさらめやは。無常たのみかたし。しらす露命いかなるみちのくさにかをちむ。まことにあはれむへし。

一、堂のうちにて。たとひ禪冊なりとも文字をみるへからず。堂にしては究理辨道すへし。明窓下にむかふては古教照心すへし。寸陰すつることなかれ。專一に功夫すへし。

- 一、おほよそ。よるも。ひるも。さらむところをは。堂主にしらすへし。ほしいままに。あそふことなかれ。衆の規矩にかゝはるへし。しらす今生のおはりにてもあるらむ。閑遊のなかにいのちをおはん。さためてのちにくやしからん。
- 一、佗人の非に手かくへからず。にくむころにて。ひとの非をみるへからず。不見佗非我是自然上敬下恭の。むかしのことばあり。またひとの非をならふへからず。わか徳を修すへし。ほとけら非を制することあれとも。にくめとにはあらず。
- 一、大小の事。かならず堂主にふれて。をこなふへし。堂主にふれずして。ことをこなはんひとは。堂をいたすへし。賓主の禮みたれは。正偏あきらめかたし。
- 一、堂のうち。ならひにその近邊にて。こゑをたかくし。かしらをつとえて。ものいふへからず。堂主これを制すへし。
- 一、堂のうちにて行道すへからず。
- 一、堂のうちにて珠數もつへからず。手をたれて。いでいり。すへからず。
- 一、堂のうちにて。念誦看經すへからず。檀那の一會の看經を請せんはゆるす。
- 一、堂のうちにて。はなたかくかみ。つばきたかくはくへからず。道業のいまだ通達せざることかなしむへし。光陰のひそかにうつり。行道のいのちをうばふことを。をしむへし。をのつから少水のうをのころあらむ。
- 一、堂の衆あやをりものをきるへからず。かみぬの。などをきるへし。むかしより道をあきらめしひと。みなかくのことし。

- 一、さげにゑひて。堂中にいるへからず。わすれてあやまらんは。禮拜懺悔すへし。またさけをとりいるへからず。にらきのかして堂中にいるへからず。
 - 一、いさかひせんものは。二人ともに下寮すへし。みづから道業をさまたくるのみにあらず。佗人をもさまたくるゆへに。いさかはんをみて制せざらんものも。をなくとかあるへし。
 - 一、堂中のをしへにかかはらざらんば。諸人をなしころにて撤出すへし。をかしと。をなじころにあらんは。とあるへし。
 - 一、僧俗を堂内にまねきて。衆を起動すへからず。近邊にても賓客と。ものいふこゑ。たかくすへからず。ことさら修練自稱して。供養をむさほることなかれ。ひさしく參學のころさしあらむか。あなかちに巡禮のあらむはいるへし。その時もかならず堂主にふるへし。
 - 一、坐禪は僧堂のことくにすへし。朝參暮請いささかも。をこたることなかれ。
 - 一、齋粥のとき。鉢盂の具足を地にをとさんひとは。叢林の式によりて間油あるへし。
 - 一、おほよそ佛祖の制誡をば。あなかちにまほるへし。叢林の清規は。ほねにも銘すへし。心にも銘すへし。
 - 一、一生安穩にして辨道無爲にあらむとねかふへし。
- 以前の教條は。古佛の身心なり。うやまひ。したかふへし。

曆仁二年己亥四月二十五日。觀音導利興聖護國寺開闢沙門道元示。
觀音導利興聖護國寺重雲堂式終。

面山述贊

述云、雲堂者僧堂之別名、僧堂衆多難容、故有重建、眞俗混雜應時立規、乃是式也、贊言、凡聖何別、前三后三、規繩一揆、如蓋投函、喪盡生涯、沒蹤跡、活蛇直入無底藍、

辯道法（大佛寺）

佛佛祖、在道而辨、非道而不辨、有法而生、無法而不生、所以大衆若坐、隨衆而坐、大衆若臥、隨衆而臥、動靜一如大衆、死生不離叢林、拔羣無益、違衆未儀、此是佛祖之皮肉骨隨也、亦乃自己之脫落身心也、然則空劫已前之修證也、無拘現成、朕兆已前之公案也、未待大悟、

二、正法眼藏洗淨

佛祖の護持しきたれる修證あり。いはゆる不染汗なり。

南嶽山觀音院大慧禪師。因六祖問。還假修證不。大慧云。修證不無。染汗即不得。六祖云。只是不染汗。諸佛之所護念。汝亦如是。吾亦如是。乃至西天祖師亦如是。云々。

大比丘三千威儀經云。淨身者。洗大小便。剪十指爪。しかあれは身心これ不染汗なれとも。淨身の法あり。淨心の法あり。たた身心をきよむるのみにあらず。國土樹下をもきよむるなり。國土いまたかつて塵穢あらされともきよむるは。諸佛之所護念なり。佛果にいたりてなほ退せず廢せざるなり。その宗旨。はかりつくすへきことかたし。作法これ宗旨なり。得道これ作法なり。華嚴經淨行品云。左右便利。常願衆生。掃除穢汗。無婬怒癡。已而就水。當願衆生。向無上道。得出世法。以水滌穢。當願衆生。具足淨忍。畢竟無垢。水かならずしも本淨にあらず。本淨にあらず。身かならずしも本淨にあらず。本淨にあらず。諸法またかくのことし。佛世尊の説。それかくのことし。しかあれとも水をもて身をきよむるにあらず。佛法によりて。佛法を保任するに。この儀あり。これを洗淨と稱す。佛祖の一身心をしたしくして正傳するなり。佛祖の一句子をちかく見聞するなり。佛祖の一光明を明らかに住持するなり。おほよそ無量無邊の功德を現成せしむるなり。身心に修行を威儀せしむる。正當愆慶時すなはち久遠の本行を具足圓成せり。このゆゑに修行の身心本現するなり。十指の爪をきるへし。十指といふは。左右の兩手の指のつめなり。足指の爪おなしくきるへし。經にいはく。つめのなかさも一麥はかりになれば罪をうるなり。しかあれば爪をなかくすへからず。爪のながきはおのつ

から外道の先蹤なり。ことさらつめをきるへし。しかあるにいま大宋國の僧家のなかに。參學眼そなはらさるともから。おほく爪をなからしむ。あるひは一寸兩寸およひ三四寸にながきもあり。これ非法なり。佛法の身心にあらす。佛家の稽古あらさるによりてかくのとし。有道の尊宿はしかあらさるなり。あるひは長髪ならしむるともからあり。これも非法なり。大國の僧家の所作なりとして。正法ならんとあやまることなかれ。先師古佛。ふかくいましめのことばを天下の僧家の長髪長爪のともからにたまふにいはく。不_レ會_二淨髮_一。不_二是俗人_一。不_二是僧家_一。便是畜生。古來佛祖誰是不_二淨髮_一者。如今不_レ會_二淨髮_一。眞箇是畜生。かくのことく示衆するに。年來不剃頭のともから。剃頭せるおほし。あるひは上堂。あるひは普説のとき。彈指かまびすしくして責呵す。いかなる道理としらす。胡亂に長髪長爪なる。あはれむへし南閻浮の身心をして非道におけること。近來二三十年。祖師道廢せるゆゑに。しかのことくともからおほし。かくのことくやから。寺院の主人となり。師號に署して。爲衆の相をなす。人天の無福なり。いま天下の諸山に道心箇渾無なり。得道箇久絶なり。祇管破落黨のみなり。かくのことく普説するに。諸方に長老の名をみたりにせるともから。うらみす陳説なし。しるへし長髪は佛祖のいましむるところ。長爪は外道の所行なり。佛祖の兒孫。これらの非法をこのむへからす。身心をきよからしむへし。剪爪剃髮すへきなり。洗大小便おこたらしむることなかれ。舍利弗この法をもて外道を降伏せしむることありき。外道の本期にあらず。身子か素懷にあらされとも。佛祖の威儀現成するところに。邪法おのつから伏するなり。樹下露地に修習するときは。起屋なし。便宜の谿谷河水等によりて。分土洗淨するなり。これは灰なし。たた二七丸の土をもちゐる。二七丸をもちゐる法は。まつ法衣をぬきてた_レみおきてのち。くろからす黄色なる土をとりて。一丸のおほきさ大豆許に分して。いし_レのうへあるひは便宜のところ。七丸をひとならへにおきて。二七丸をふたへにならへおく。そのち磨石にもち

ゐるへき石をまうく。そののち扇す。扇後使籌。あるひは使紙。そののち水邊にいたりて洗淨する。まつ三丸の土をたつさへて洗淨す。一丸土を掌にとりて。水すこしはかりをいれて。水に合してときて。泥よりもうすく漿はかりになして。まつ小便を洗淨す。つきに一丸の土をもてさきのことくして大便處を洗淨す。つきに一丸の土をさきのことくして略して觸手をあらふ。寺舎に居してよりこのかたは。その屋を起立せり。これを東司と稱す。あるときは間といひ廁といふときもありき。僧家の所住にかならずあるへき屋舎なり。東司にいたる法は。かならず手巾をもつ。その法は。手巾をふたへにをりて。ひたりのひちのうへにあたりて衫袖のうへにかくるなり。すてに東司にいたりては。淨竿に手巾をかくへし。かくる法は。背にかけたりつるかことし。もし九條七條等の袈裟を著してきたれは。手巾にならへてかくへし。おちさらんやうに打併すへし。倉卒になけかくることなかれ。よくよく記號すへし。記號といふは。淨竿に字をかけり。白紙にかきて月輪のことく圓にして。淨竿につけ列せり。しかあるをいつれの字にわか直襪はおけりとわすれずみたらさるを。記號といふなり。衆家おほくきたらんに。自佗の竿位を亂すへからす。このあひた。衆家きたりてたちつらなれば。又手して拵すへし。拵するにかならずしもあひむかひて曲射す。たた又手をむねのまへにあてて氣色ある拵なり。東司にては直襪を著せさるにも。衆家と拵し氣色するなり。もし兩手ともにもまた觸せず。兩手ともにもをひさげさるには。兩手を又して拵すへし。もしすてに一手を觸せしめ一手にものを提せらんときは。一手にて拵すへし。一手にて拵するには。手をあふけて指頭すこしきかめて水を掬せんとするかことくしてもちて。頭をいさ_レか低頭せんとするかことく拵するなり。佗かくのことくせば。おのれかくのことくすへし。おのれかくのことくせば。佗またしかあるへし。褌衫および直襪を脱して手巾のかたはらにかく。かくる法は。直襪をぬきとりて。ふたつのそでをうしろへ。あはせて。ふたつのわきのしたをとりあはせてひきあくれば。ふたつ

のそでかさなれる。このときは。左手にては直襪のうなちのうらのもとをとり。右手にては。わきをひきあぐれば。ふたつのたもとと左右の兩襟とかさなるなり。兩袖と兩襟とをかさねて。またたてさまになかよりをりて。直襪のうなちを淨竿の那邊えなけす。直襪の裾ならひに袖口等は。竿の遮邊にかかれり。たとへは直襪の合腰。淨竿にかくるなり。つきに竿にかけたりつる手巾の遮那兩端をひきちかひて。直襪よりひきこして。手巾のかからさりつるかたにて。またちかへてむすひとむ。兩三厘もちかへちかへしてむすひて直襪を淨竿より落地せしめさらんとなり。直襪にむかひて合掌す。つきに袈裟をとりて兩臂にかく。つきに淨架にいたりて。淨桶に水をもりて。右手に提して淨廁にのぼる。淨桶に水をいるる法は。十分にみつることなかれ。九分を度とす。廁門のまへにして換鞋すへし。蒲鞋をはきて自鞋を廁門の前に脱するなり。これを換鞋といふ。

禪苑清規云。欲^レ上^三東司。應^三須^レ預^レ往。勿^レ致^三臨^レ時^レ内^レ過^レ倉^レ卒。乃^三疊^レ袈^レ裝。安^三寮^レ中^レ案^レ上。或^三淨^レ竿^レ上。廁内にいたりて左手にて門扇を掩す。つきに淨桶の水をすこしはかり槽裏に瀉す。つきに淨桶を當面の淨桶位に安す。つきにたちなから槽にむかひて彈指三下すへし。彈指のとき。左手は拳にして左腰につけてもつなり。つきに袴口衣角ををさめて。門にむかひて兩足に槽背の兩邊をふみて。蹲居し屬す。兩邊をけかすことなかれ。前後にそまじむることなかれ。このあひだ默然なるへし。隔壁と語笑し。聲をあけて吟詠することなかれ。涕唾狼藉なることなかれ。怒氣卒暴なることなかれ。壁面に字をかくへからす。廁籌をもて地面を割することなかれ。屙屎退後。すへからく使籌すへし。またかみをもちるる法あり。故紙をもちるへからす。字をかきたらん紙もちるへからす。淨籌觸籌わきまふへし。籌はなかさ八寸につくりて三角なり。ふとさは手拊指大なり。漆にてぬれるもあり。未漆なるもあり。觸は籌斗になけおき淨はもとより籌架にあり。籌架は槽のまへの版頭のほとりにおけり。使籌使紙のち。洗淨する法

は。右手に淨桶をもちて。左手をよくゆるぬらしてのち。左手を掬につくりて水をうけて。まつ小便を洗淨する三度。つきに大便をあらふ。洗淨如法にして浮潔ならしむへし。このあひたあらく淨桶をかたふけて。水をして手のほかにあましおとしあふれちらして。水をはやくうしなふことなかれ。洗淨しをわけて淨桶を安桶のところにおきて。つきに籌をとりてのこひかはかす。あるひは紙をもちるへし。大小兩處。よくよくのこひかはかすへし。つきに右手にて袴口衣角をひきつくりて。右手に淨桶を提して廁門をいつるちなみに蒲鞋をぬぎて自鞋をはく。つきに淨桶にがへりて。淨桶を本所に安す。つきに洗手すへし。右手に灰匙をとりて。まつすくひて瓦石のおもてにおきて。右手をもて滴水を點して觸手をあらふ。瓦石にあてるときあらふなり。たとへはさびあるかたなを砥にあててとくかことし。かくのこくとく灰にて三度あらふへし。つきに土をおきて水を點してあらふこと三度すへし。つきに右手に皂莢をとりて小桶の水にさしひたして。兩手あはせてもみあらふ。腕にいたらんとするまでもよくよくあらふなり。誠心に住して慇懃にあらふへし。灰三土三皂莢一なり。あはせて一七度を度とせり。つきに大桶にてあらふ。このときは面藥土灰等もちるす。たた水にても湯にてもあらふなり。一番あらひて。その水を小桶にうつして。さらにあたらしき水をいれて兩手を洗ふ。

華嚴經云。以水盥掌。常願衆生。得上妙手。受持佛法。水杓をとらんことは。かならず右手にてすへし。このあひた桶杓おとをなしかまひすしくすることなかれ。水をちらし皂莢をちらし。水架の邊をぬらし。おほよそ倉卒なることなかれ。狼藉なることなかれ。つきに公界の手巾に手をのこふ。あるひはみつからか手巾にのこふ。手をのこひをはりて。淨竿のした直襪のまへにいたりて。袈裟を脱して竿にかく。つきに合掌してのち。手巾をとき直襪をとりて著す。つきに手巾を左臂にかけて塗香す。公界に塗香あり。香木を寶瓶形につくれり。その大は拊指大なり。なかさ四指量

につくれり。織索の尺餘なるをもちて。香の兩端に穿貫せり。これを淨竿にかけおけり。これを兩掌をあはせてもみあはすれば。その香氣おのつから兩手に薰す。袈を竿にかくるとき。おなしくうへにかけかさねて。袈と袈とみたらしめ亂纏せしむることなかれ。かくのごとくするみなこれ淨佛國土なり。莊嚴佛國なり。審細にすへし倉卒にすへからず。いそぎをはりてかへりなはやとおもひいとむことなかれ。ひそかに東司上不説佛法の道理を思量すへし。衆家のきたりゐる面をしきりにまもることなかれ。廁中の洗淨には。冷水をよろしとす。熱湯は腸風をひきおこすといふ。洗手には濃湯をもちゐるさまたけなし。釜一隻おくことは。燒湯洗手のためなり。清規云。晩後燒湯上油。常令湯水相續。無使大衆動念。しかあればしりぬ湯水ともにもちゐるなり。もし廁中の觸せることあらは。門扇を掩して。觸牌をかくへし。もしあやまりて落桶あらば。門扇を掩して。落桶牌をかくへし。これらの牌かかれらん局にはのほることなかれ。もしさきより廁上にのほれらん。ほかに人ありて彈指せは。しはらくいづへし。清規云。若不洗淨。不得坐僧牀。及禮三寶。亦不得受人禮拜。三千威儀經云。若不洗大小便。得突吉羅罪。亦不得淨坐具上坐。及禮三寶。設禮無福德。しかあはすなはち辨道功夫の道場。この儀をさきにするへし。あに三寶を禮せさらんや。あに人の禮拜をうけさらんや。あに人を禮せさらんや。佛祖の道場。かならずこの威儀あり。佛祖道場中人。かならずこの威儀具足あり。これ自己の強爲にあらず。威儀の云爲なり。諸佛の常儀なり。諸祖の家常なり。たた此界の諸佛のみにあらず。十方の佛儀なり。淨土穢土の佛儀なり。少聞のともがらおもはくは。諸佛には廁屋の威儀あらず。娑婆世界の諸佛の威儀は。淨土の諸佛のことくにあらずとおもふ。これは學佛道にあらず。しるへし淨穢は離人の滴血なり。あるときはあたたかなり。あるときはすさまじし。諸佛に廁屋ありしるへし。

十誦律第十四云。羅睺羅沙彌宿佛廁。佛覺了。佛以右手摩羅睺羅頂。說是偈言。汝不爲貧窮。亦不爲富貴。但爲求道故。出家應忍苦。しかあはすなはち佛道場に廁屋あり。佛廁屋裏の威儀は洗淨なり。祖祖相傳しきたれり。佛儀のなほのこれる。慕古の慶快なり。あへかたきにあへるなり。いはんや如來かたしけなく廁屋裏にして。羅睺羅のために説法します。廁屋は佛轉法輪の一会なり。この道場の進止。これ佛祖正傳せり。

摩訶僧祇律第三十四云。廁屋不得在東在北。應在南在西。小行亦如是。この方宜によるへし。これ西天竺國諸精舍の圖なり。如來現在の建立なり。しるへし一佛の佛儀のみにあらず。七佛の道場なり。精舍なり。はじめたるにあらず。諸佛の威儀なり。これらをあきらめさらんよりさきは。寺院を創し。佛法を修行せん。あやまりはおほく。佛威儀をなはらす。佛菩提をまた現前せざらん。もし道場を建立し。寺院を創せんには。佛祖正傳の法儀によるへし。これ正嫡正傳の法儀によるへし。これ正嫡正傳なるかゆるに。その功德あつめかさなれり。佛祖正傳の嫡嗣にあはされは。佛法の身心いまたしらす。佛法の身心しらは。佛家の佛業あきらめさるなり。いま大師釋迦牟尼佛の佛法。あまねく十方につたはれるといふは。佛身心の現成なり佛身心現成の正當恁麼時かくのことし。

正法眼藏洗淨。

爾時延應元年己亥冬十月二十三日在雍州宇治縣觀音導利興聖寶林寺示衆。

面山述贊

述云、法界表裏、誰測_レ淨不淨、但願_レ衆爲淨、逆_レ聖爲不淨、是故不染汚之教訓、不可_レ不奉行、

贊言、能淨與_レ所淨、虚空合_レ虚空、佛佛眞榜樣、祖々實家風、三賢十聖沒交涉、破_レ霧旭昇_レ自_レ嶺東、

洗淨偈

大小便時、當願衆生、棄食瞋痴、獨除罪垢
事訖就水、當願衆生、出世法中、速疾而往

三、正法眼藏洗面

法華經云。以油塗身。澡浴塵穢。著新淨衣。内外俱淨。いはゆるこの法は。如來まさに法華會上にして。四安樂行の行人のためにとましますところなり。餘會の説にひとしからず。餘經におなじかるへからず。しかあれは身心を澡浴して。香油を塗り。塵穢をのそくは。第一の佛法なり。新淨の衣を著する。ひとつの淨法なり。塵穢を澡浴し。香油を身に塗するに。内外俱淨なるへし。内外俱淨るとき依報正報清淨なり。」しかあるに佛法をきかず。佛道を參せざる。愚人いはく。澡浴はわつかにみのはたへをすすくといへとも。身内に五臟六腑あり。かれらを一一に澡浴せさらんは。清淨なるへからず。しかあれはあながちに身表を澡浴すへからず。かくのことくいふともからは。佛法いまたしらすきかず。いまた正師にあはず。佛祖の兒孫にあはざるなり。」しはらくかくのことくの邪見のともからのことばをなげすて、佛祖の正法を參學すへし。いはゆる諸法の邊際いまた決斷せず。諸大の内外また不可得なり。かるかゆるに身心の内外また不可得なり。しかあれとも最後身の菩薩。すてにいまし道場に坐し成道せんとするとき。まづ袈裟を洗滌し。つきに身心を澡浴す。これ三世十方の諸佛の威儀なり。最後身の菩薩と余類と。諸事みなおなしからず。その功德智慧身心莊嚴。みな最尊最上なり。澡浴洗滌の方も。またかくのことくなるへし。いはんや諸人の身心。その邊際。ときにしたかふてことなることあり。いはゆる一坐のとき。三千界みな坐斷せらるる。このときかくのことくなりといへとも。自佗の測量にあらず。佛法の功德なり。その身心量。また五尺六尺にあらず。五尺六尺は。さたまれる五尺六尺にあらざるゆるなり。所在も此界他界盡界無盡界等の有邊無邊にあらず。這裏是什處所在。説細説麤のゆるに。心量また思量分別のよくしるへきにあらず。不思議不分別のよくきはむへきにあらず。身心

量かくのことくなるがゆゑに。澡浴量もかくのことし。この量を拈得して修證する。これ佛佛祖祖の護念するところなり。計我をさきとすへからず。計我を實とすへからず。しかあればすなはちかくのことく澡浴し浣洗するに。身量心量を究盡して清淨ならしむるなり。たとひ四大なりとも。たとひ五蘊なりとも。たとひ不壞性なりとも。澡浴するみな清淨なることをうるなり。これすなはちたた水をきたしすきてのち。そのあとは清淨なるとのみしるべきにあらず。水なにとして本淨ならん。本淨本不淨なりとも。來著のところをして淨不淨ならしむといはず。たた佛祖の修證を保任するとき用水浣洗。以水澡浴等の佛法つたはれり。これによりて修證するに。淨を超越し。不淨を透脱し。非淨非不淨を脱落するなり。しかあればすなはちいま染汗せされども澡浴し。すてに大清淨なるにも澡浴する法は。ひとり佛祖道のみに保任せり。外道のしるところにあらず。もし愚人のいふかごとくならは。五臟六腑を細塵に抹して即空ならしめて大海水をつくしてあらふとも。塵中なほあらはすは。いかてか清淨ならん。空中をあらはすは。いかてか内外の清淨を成就せん。愚夫また空を澡浴する法いまたしらさるへし。空を拈來して空を澡浴し。空を拈來して身心を澡浴す。澡浴を如法に信受するもの。佛祖の修證を保任すへし。いはゆる佛佛祖祖嫡正傳する正法には。澡浴をもちゐるに。身心内外。五臟六腑。依正二報。法界虚空の内外中間。たちまちに清淨なり。香華をもちゐてきよむるとき。過去。現在。未來。因縁行業。たちまちに清淨なり。佛言。三沐三薰。身心清淨。しかあれば身をきよめ心をきよむる法は。かならず一沐しては一薰し。かくのことくあひつらなれて。三沐三薰して。禮佛し轉經し。坐禪し經行するなり。經行をはりて。さらに端坐坐禪せんとするには。かならず洗足するといふ。足がれ觸せるにあらされとも。佛祖の法それかくのことし。それ三沐三薰すといふは。一沐とは。一沐浴なり。通身みな沐浴す。しかうしてのちつねのことくして衣裳を著してのち。小爐に名香をたきて。ふところのうちおよひ袈裟坐處

等に薰するなり。しかうしてのちまた沐浴してまた薰す。かくのことく三番するなり。これ如法の儀なり。このとき。六根六塵あらたにきたらされとも。清淨の功德ありて現前す。うたかふへきにあらず。三毒四倒いまたのそかうらされとも。清淨の功德直ちに現前するは。佛法なり。たれか凡慮をもて測度せん。なにひとか凡眼をもて覷見せん。たとへは沈香をあらひきよむるとき。片々にをりてあらふへからず。塵塵に抹してあらふへからず。體をあらひて清淨をうるなり。佛法にかならず浣洗の法さたまれり。あるひは身をあらひ心をあらひ。足をあらひ面をあらひ。目をあらひ口をあらひ。大小二行をあらひ。手をあらひ。鉢盂をあらひ。袈裟をあらひ。頭をあらふ。これらみな三世の諸佛諸祖の世法なり。佛法僧を供養したてまつらんとするには。もろもろの香をとりきたりては。まつみつからか兩手をあらひ。嗽口洗面して。きよきころもを著し。きよき盤に淨水をうけて。この香をあらひきよめて。しかうしてのちに佛法僧の境界には供養してまつるなり。ねかはくは摩娑山の梅檀香を。阿那婆達池の八功德水にてあらひて三寶に供養したてまつらんことを。

洗面は西天竺國よりつたはれて。東震旦國に流布せり。諸部の律にあきらかなりといふとも。なほ佛祖の傳持。これ正嫡なるへし。數百歳の佛佛祖祖おこなひきたれるのみにあらず。億千萬劫の前後に流通せり。たた垢膩をのそくのみにあらず。佛祖の命脈なり。いはく。もしおもてをあらはされは。禮をうけ陀を禮する。ともに罪あり。自體體陀。能禮所禮。性空寂なり。性脱落なり。かるがゆゑにかならず洗面すへし。洗面の時節。あるひは五更。あるひは昧旦。その時節なり。先師の天童に住せしときは。三更の三點を。その時節とせり。袈裟たつさへて洗面架におもく。手巾は一幅の布なかさ一丈二尺なり。そのいろしろかるへからず。しろきは制す。三千威儀經云。當用二手巾。有。五事。一者當拭上下頭。二者當用二頭拭手。以三頭拭面。三者不得持拭鼻。四者以用拭三

汚。當_レ即洗_レ之。五者不_レ得_レ拭_レ身體。若_レ澡浴各當_レ自有_レ巾。まさに手巾を持せんにかくのこどく護持すへし。手巾をふたつにをりて。左のひちにあたりてそのうへにかく。手巾は半分はおもてをのこひ。半分にては手をのこふ。はなをのこふへからすとは。はなのうち。およひ鼻涕をのこはす。わきせなかはらへそももはきを手巾してのこふへからす。垢膩にけかれたらんに洗滌すへし。ぬれしめれらんは火に烘し日にほしてかはかすへし。手巾をもて沐浴のときもちゐるへからす。雲堂の洗面處は。後架なり。後架は照堂の西なり。その屋圖つたはれり。菴内およひ單寮は。便宜のところにかまふ。住持人は方丈にて洗面す。昔年老宿居處に。便宜に洗面架をおけり。住持人。もし雲堂に宿するときは。後架にして洗面すへし。洗面架にいたりて。手巾の中分をうなちにかく。ふたつのはしを左右のかたより。まへにひきこして。左右の手にて左右のわきより。手巾の左右のはしをうしろえいたして。うしろにておのおのひきちかひて左のはしは右えきたし。右のはしは左にきたして。むねのまへにあたりてむすふなり。かくのこどくすれは襦袢のくひは。手巾におほはれ。兩袖は手巾にゆひあけられて。ひちよりかみにあかりぬるなり。ひちよりしもうてたなごころあらはなり。たとへはたすきかけたらんかことし。そのちもし後架ならば。面桶をとりて。かまのほとりにいたりて一桶の湯をとりて。かへりて洗面架の上におく。もし餘處にては。打湯桶の湯を面桶に在る。」つきに楊枝をつかふへし。今大宋國諸山には。嚼楊枝の法ひさしくすたれてつたはれされは。嚼楊枝のところなしといへとも。今吉祥山永平寺嚼楊枝のところあり。すなはち今案なり。これによればまつ嚼楊枝すへし。楊枝を右手にとりて。咒願すへし。華嚴經淨行品云。手執楊枝。當願衆生。心得正法。自然清淨。この文を誦しをはりて。さらに楊枝をかまんとするに。すなはち誦すへし。晨嚼楊枝。當願衆生。得調伏牙。噬諸煩惱。この文を誦しをはりて。また嚼楊枝すべし。」楊枝のなかさあるひは四指。あるひは八指。あるひは十二指。あるひは十六指なり。摩訶僧祇律第三

十四云。齒木應_レ量用。極長十六指。極短四指。しるへし四指よりもみちかくすへからす。十六指よりもなかき。量に應_レせず。ふとさは手小指大なり。しかいひとそれよりほそきさまたけなし。そのかたち手小指形なり。一端はふとく。一端ほそし。」ふときはしを微細にかむなり。三千威儀經云。嚼頭不_レ得_レ過_レ三分。よくかみて。はのうへはのうら。みかくかことくときあらふへし。たひたひときみかきあらひすくへし。はのもとのししうへ。よくみかきあらふへし。はのあひたよくかきそろへきよくあらふへし。嗽口たひたひすれは。すすきよめらる。」しかうしてのちしたをこそくへし。三千威儀經云。刮舌有五事。一者不_レ得_レ過_レ三返。二者舌上血出當_レ止。三者不_レ得_レ大振_レ手。汚_レ僧伽梨衣若足。四者樂_レ楊枝莫_レ當_レ入道。五者常當_レ屏處。いはゆる刮舌三返といふは。水をくちにふくみて。舌をこそけこそけすること三返するなり。三刮にはあらず。血いてはまさにやむへしといふにこころうへし。よくよく刮舌すへしといふことは。三千威儀經云。淨口者。嚼楊枝。漱口。刮舌。」しかあれは楊枝は。佛祖ならひに佛祖兒孫の護持しきたれるところなり。

佛在_レ王舍城竹園之中。與_レ千二百五十比丘俱。臘月一日。波斯匿王。是日設_レ食。清晨躬_レ手授_レ佛楊枝。佛受嚼_レ竟擲_レ殘著_レ地。便生_レ薔鬱而起。根莖涌出。高五百由旬。枝葉雲布。周匝亦爾。漸復生_レ華。大如_レ車輪。遂復有_レ果。大如_レ五斗瓶。根莖枝葉。純是七寶。若干種色。映殊麗妙。隨_レ色發_レ光。掩_レ蔽日月。食_レ其果者。美逾_レ甘露。香氣四塞。聞者情悅。香風來吹。更相_レ撐角。枝葉皆出_レ和雅之音。暢_レ演法要。聞者無_レ厭。一切人民。觀_レ茲樹變。敬信之心。倍益純厚。佛乃說_レ法。應_レ適其意。心皆開解。志_レ求佛者得果生天。數其衆多。佛およひ衆僧を供養する法は。かならず晨旦に楊枝をたてまつるなり。そのち種種の供養をまうく。佛に楊枝をたてまつれることおほく。ほとけ楊枝をもちゐさせたまふことおほけれとも。しはらくこの波斯匿王みつからてつから供養しますます因

縁ならひにこの高樹の因縁。しるべきゆゑに擧するなり。またこの日。すなはち外道六師。ともにほとけに降伏せられたてまつりて。おとろきおそりてにけはしる。つひに六師ともに投河而死。六師徒類九億人。皆來師佛求爲弟子。佛言善來比丘。鬚髮自落。法衣在身。皆成沙門。佛爲說法。示其法要。漏盡結解。悉得羅漢。しかあれはすなはち如來すでに楊枝をもちひますゆゑに。人天これを供養したてまつるなり。あきらかにしりぬ嚼楊枝これ諸佛菩薩。ならひに佛弟子の。かならず所持なりと云ふことを。もしもちひさらんは。その法失墜せり。かなしまさらんや。梵網菩薩戒經言云。若佛子。常應一時頭陀。冬夏坐禪。結夏安居。常用楊枝。澡豆。三衣。瓶。鉢。坐具。錫杖。香爐。漉水囊。手巾。刀子。火燧。錘子。繩牀。經律。佛像菩薩形像。而菩薩行頭陀時。及遊方時。行來百里千里。此十八種物。常隨其身。頭陀者從正月十五日。至三月十五日。八月十五日。至十月十五日。是二時中。此十八種物。常隨其身。如鳥二翼。この十八種物。ひとつも虧闕すへからず。もし虧闕すれば。鳥の一翼おちたらんがごとし。一翼のこれりとも。飛行することあたはし。鳥道の機縁にあらさらん。菩薩もまたかくのごとし。この十八種の羽翼そなはらされは。行菩薩道あたはす。十八種のうち。楊枝すてに第一に居せり。最初に具足すへきなり。この楊枝の用不をあきらめんともから。すなはち佛法をあきらむる菩提薩埵なるへし。いまたかつてあきらめさらんは。佛法也未夢見在ならん。しかあれはすなはち見楊枝は見佛祖なり。或有人問意旨如何。幸値永平老漢嚼楊枝。この梵網菩薩戒は。過去現在未來の諸佛菩薩。かならず過現當に受持したれり。しかあれは楊枝また過現當に受持したれり。禪苑清規云。大乘梵網經。十重四十八輕。並須讀誦通利。善知持犯開遮。但依金口聖言。莫擅隨於庸輩。まさにしるへし佛佛祖正傳の宗旨をかくのごとし。これに違せんは佛道にあらず。佛法にあらず。祖道にあらず。しかあるに大宋國。いま楊枝たえてみえず。嘉定十六年癸未四月のなかに。はし

めて大宋に諸山諸寺をみるに。僧侶の楊枝をしるなく。朝野の貴賤おなしくしらす。僧家すへてしらするゆゑに。もし楊枝の法を問著すれば。失色して度を失す。あはれむへし白法の失墜せることを。わづかにくちをすすぐとからは。馬の尾を寸餘に切りたるを。牛の角のおほきさ三分ばかりにて方につくりたるかなかさ六七寸なる。そのはし二寸ばかりに。うまのたちかみのごとくにうゑて。これをもちて牙齒をあらふのみなり。僧家の器にもちひかたし。不淨の器ならん。佛法の器にあらず。俗人の祠天するにも。なほきらひぬへし。かの器。また俗人僧家。ともにくつちりをはらふ器にもちひる。また梳髪のときもちひる。いささかの大小あれとも。すなはちこれひつなり。かの器をもちひるも。萬人かひとりなり。しかあれは天下の出家。在家ともにその口氣はなはたくさし。二三尺をへたててもの云ふとき。口臭きたる。かくものたへかたし。有道の尊宿と稱し。人天の道師と號するともからも。漱口刮舌嚼楊枝の法ありとたにもしらす。これをもて推するに。佛祖の大道いま陵夷をみるらんこといくそはくそといふことしらす。いまわれら露命を萬里の蒼波にをします。異域の山川をわたりしきて。道をとふらふとすれとも。漉運かなしむへし。いくはくの白法かさきたちて滅没しぬらん。をしむへしをしむへし。しかあるに日本一國朝野の道俗。ともに楊枝を見聞す。佛光明を見聞するならん。しかあれとも嚼楊枝それ如法ならず。刮舌の方つたはれす。倉卒なるへし。しかあれとも宋人の楊枝をしらさるにたくらふれは。楊枝をもちひるへしとしれるは。おのつから上人の法をしれり。仙人の法にも楊枝をもちひる。しるへしみな出塵の器なり。清淨の調度なりといふことを。三千威儀經云。用楊枝有五事。一者斷當如度。二者破當如法。三者嚼頭不得過三分。四者疎齒當中三齒。五者當汗深目用。いま嚼楊枝漱口の水を。右手にうけてもて目をあらふこと。みなもと三千威儀經の説なり。いま日本國の往代の庭訓なり。刮舌の方は。僧正榮西つたふ。楊枝つかひてのち。すてんとするとき。兩手をもて楊枝のかみたる

かたより二片に擘破す。その破口のときかたを。よこさまに舌上にあててこそく。すなはち右手に水をうけて。口に
 入れて漱口し刮舌す。漱口刮舌。たひたひし。擘楊枝の角にてこそけこそけして血出を度とせんとするかことし。漱
 口のときこの文を密誦すへし。華嚴經云。澡漱口齒。當願衆生。向淨法門。究竟解脫。たひたひ漱口して。くちひる
 のうちと。したのした。あきにいたるまで。右手の第一指。第二指。第三指等をもて。指のはらにてよくよくなめり
 たるかことくなることあらひのそくへし。油あるもの食せらんことちかからんには。皂莢をもちぬるへし。楊枝つか
 ひをはりて。すなはち屏處にすつすし。楊枝すててのち。三彈指すへし。後架にしては棄楊枝をうくる事あるへし。
 餘處にては屏處にすつへし。漱口の水は面桶のほかにきすつへし。」つきにまさしく洗面す。兩手に面桶の湯を掬し
 て。額より兩眉毛。兩目。鼻孔。耳中。顛。頰。あまねくあらふ。まつよくよく湯をすくひかけて。しかうしてのち
 摩沐すへし。涕唾鼻涕を面桶の湯におとしいるることなかれ。かくのことくあらふとき。湯を無度につひやして。面
 桶のほかにもらしおとしちらして。はやくうしなふことなかれ。あかおちあふらのそかうりぬるまであらふなり。耳
 裏あらふへし。著水不得なるがゆゑに。眼裏あらふへし。著沙不得なるがゆゑに。あるひは頭髮頂額までもあらふ。
 すなはち威儀なり。」洗面をはりて面桶の湯をすててのちも。三彈指すへし。つきに手巾のおもてをのこふはしにて
 のこひかはかすへし。しかうしてのち手巾もとのことく脱し。とりてふたへにして。左背にかく。雲堂の後架には。
 公界の拭面あり。いはゆる一匹布をもうけたり。烘櫃あり。衆家ともに拭面するに。たらさるわつらひなし。かれに
 ても頭面のこふへし。また自己の手巾をもちぬるもともにこれ法なり。洗面のあひた。桶杓ならしておとをなすこと
 かまひすしくすることなかれ。湯水を狼藉にして近邊をぬらすことなかれ。ひそかに觀想すへし。後五百歳にうまれ
 て。邊地邊島に處すれとも。宿番くちすして。古佛の威儀を正傳し。染汗せず。修證する。隨喜歡喜すへし。雲堂に

かへらんに。輕歩低聲なるへし。昔年宿徳の艸菴。かならず洗面架あるへし。洗面せざるは非法なり。洗面のとき。
 面藥をもちぬる法あり。おほよそ嚼楊枝。洗面。これ古佛の正法なり。道心辨道のともから。修證すへきなり。ある
 ひは湯をえさるには。水をもちぬる舊例なり。古法なり。湯水すへてえさらんときは。早晨よく拭面して。香艸抹香
 等をぬりてのち。禮佛誦經燒香坐禪すへし。いまた洗面せずは。もろもろのつとめともに無禮なり。

正法眼藏洗面。

延應元年己亥十月二十三日在觀音導利興聖寶林寺示衆。

天竺國。晨旦國者。國王。王子。大臣。百官。在家。出家。朝家男女。百姓萬民。みな洗面す。家宅の調度にも面
 桶あり。あるひは銀。あるひは鐵なり。天祠神廟にも。毎朝に洗面を供す。佛祖の塔頭にも。洗面をたてまつる。在
 家出家洗面ののち。衣裳をたしくして。天をも拜し。神をも拜し。祖家をも拜し。父母をも拜す。師匠を拜し。三
 寶を拜し。三界萬靈十方眞宰を拜す。いまは農夫田夫。漁椎翁までも。洗面わするることなし。しかあれとも嚼楊枝
 なし。日本國は。國王。大臣。老少。朝野。在家出家の貴賤。ともに嚼楊枝。漱口の法をわすれず。しかあれとも洗
 面せず。一得一失なり。いま洗面。嚼楊枝。ともに護持せん。補虧闕の興隆なり。佛祖の照臨なり。

寛元元年癸卯十月二十日在越州吉田縣吉峰寺重示衆。

健長二年庚戌正月十一日越州吉田郡吉祥山永平寺示衆。

義雲頌

水不洗水

海面無塵波洗浪、山毛而賦綠衝天、
清風琢磨乾坤淨、雪上加霜明月前、

面山述贊

述云、衲子淨洗本來面目、謂之洗面、洗面時全體清淨法身、八萬毛孔無一點染汚、
直入三無差法門、

贊言、十方法界一時新、鼻直眼橫清淨身、瞥轉靈機通氣處、本來面目悅開闢、

洗面偈

以水洗面、當願衆生、得淨法門、永無垢染、

入浴偈

沐浴身體、當願衆生、身心無垢、內外光潔、

四、正法眼藏示庫院文

寛元四年八月六日。示衆云。齋僧之法。以敬爲宗。はるかに西天竺の法を正傳し。ちかくは震旦國の法を正傳するに。如來滅度ののち。あるひは諸天の天供を。佛ならひに僧に奉獻し。あるひは國王の王膳を。佛ならひに僧に供養し。たてまつりき。そのほか長者居士のいへよりたてまつり。毘闍首陀のいへよりたてまつるもありき。かくのことくの供養。ともに敬重するところ。ねんころなり。よく天上人間のなかに。極重の敬禮をもちぬ。至極の尊言をして。うやまひたてまつりて。飯饌等の供養のそなへを造作するなり。深意あり。いま遠方の深山なりとも。寺院の香積局。その禮儀言語。したしく正傳すへきなり。これ天上人間の佛法を習學するなり。いはゆる粥をば。御粥とまをすへし。朝粥とも。まをすへし。粥とまをすへからす。齋をば。御齋とまをすへし。齋時とも。まをすへし。齋ともをすへからす。よねしろめ。まゐらせよと。まをすへし。よねつけと。いふへからす。よねあらひ。まゐらすをは。淨米し。まゐらせよと。まをすへし。よねかせと。まをすへからす。御菜の御料のなにも。えりまゐらせよと。まをすへし。菜えれと。まをすへからす。御汁のもの。し。まゐらせよと。まをすへし。汁によと。まをすへからす。御羹しまゐらせよとまをすへし。羹せよと。まをすへからす。御齋御粥は。むませさせ。たまひたると。まをすへし。齋粥いれたてまつらん調度。みなかくのことく。うやまをへし。不敬は。かへりて殃過をまねく。功德をうることなきなり。齋粥をととのへ。まゐらすとき。人の息にて米菜およひ。いつれの。ものをも。ふくへからす。たとへかききたるものなりとも。綴袖に觸することなかれ。頭顔に觸れたる手を。いまたあらはすして。齋粥の器。およひ齋粥に手ふるることなかれ。よねをえりまゐらすより。乃至飯羹に。つくり。まゐらす。經營のあひた。身の

かゆきところ。かきては。かならず。その手をあらふへし。齋粥とのへまゐらするところにては。佛經の文。およひ祖師の語を諷誦すへし。世間の語。雜穢の話。いふへからず。おほよそ。米菜鹽醬等の。いろいろのもの。ましますと。まをすへし。米あり菜ありと。まをすへからず。齋粥のあらんところを。すきんには。僧行者は問訊したてまつるへし。零菜零米等ありとも。齋粥のら使用すへし。齋粥をはらさらんほと。をかすへからず。齋粥とのへまゐらす調度。ねんころに護惜すへし。佗事に。もちゐへからず。在家より。きたれらん。ともからの。いまた手をきよめさらんには。手をふれさすへからず。在家よりきたれらん菜果等。いまたきよめすは。洒水して行香し行火してのちに。三寶衆僧にたてまつるへし。現在大宋國の諸山諸寺には。もし在家より饅頭。乳餅。蒸餅等。きたらんは。かさねてむしまゐらせて。衆僧にたてまつる。これきよむるなり。いまたむさされは。たてまつらざるなり。これおぼかるなかに。すこしばかりなり。この大旨をえて庫院香積。これを行すへし。萬事非儀なることなかれ。

右條條。佛祖之命脈。衲僧之眼睛也。外道未知。天魔不堪。唯有佛子。乃能傳之。庫院之知事。明察莫失焉。

開闢沙門 道元示

永平寺今告知事。自今已後。若過午後。檀那供飯。留待翌日。如其麪餅菓子。諸般粥等。雖晚猶行。乃佛祖會下藥石也。況大宋國內。有道之勝獨也。

如來曾許雪山僧裏服衣。當山亦許雪時之藥石矣。

開闢永平寺 希玄印

面山述贊

述云、香積者、有米盆覆卻之深誠、有米裏有蟲之高踪、衲僧慧令之所係、則吾祖之所、以純密于此也、三業是一、是故慎于言者慎于意也、慎于意者慎于身也、秘密瑜伽、豈可怠慢哉、

贊言、須彌百億鉢中山、日日淨供豈等閑、不是瑜伽三秘密、鐵丸難免獄無間、

食時誓願偈

一口爲斷一切惡、二口爲修一切善、三口爲度諸衆生、指共成佛道、

粥時偈

粥有十利、饒益安人、果報無邊、究竟常樂

齋時偈

三德六味、施佛及僧、法界有情、普同供養

赴粥飯法 (永平寺)

經曰、若能於食等者、諸法亦等、諸法等者、於食亦等、方令教法而等食、教食而法等、是故法若法性、食亦法性、法若真如、食亦真如、法若一心、食亦一心、法若菩提、食亦菩提、名等義等、故言等、經曰、名等義等、一切皆等、純一無雜、馬祖曰、建立法界、盡是法界、若立真如、盡是真如、若立理、盡是理、若立事、一切法盡是事、然則等者非等均等量之等、是正等覺之等也、正等覺者、本末究竟等也、所以食者諸法之法也、唯佛與佛之所究盡也、正當慳嗔時有實相性體力作因緣、是以法是食、食是法也、是法者、爲前佛后佛之所受用也、此食者、法真禪悅之所充足也、

附 錄

大智禪師、示寂阿禪門

菊池肥後守
藤武時入道

十二時法語

佛祖ノ正傳ハ、タタ坐ニテ候、坐禪トモホスハ、手ナクミ、足ヲモクミ、身ヲモユカメス、正シク持セタマヒテ心ニ何コトモオモフコトナク、タトヒ佛法ナリトモ、心ヲカケスシテ御座候ヘシ、ソレヲ佛ニモコエタルト、モホシ候ナリ、イハンヤ生死ノ流轉ヲヤ、コノ身ヲ一タヒ諸佛ノ願海ニ捨サフヲ後ニハ、タタ諸佛ノ御フルマヒノコトクニ、行セサセタマヒ候ヒテ、二タヒワタクシニ我身ヲカエリミルコトアルヘカラス、諸佛ノ御フルマヒト申ハ寺ニ居サフラヒテ後ハ、カリソメニモ、在家ニ出入スルコトヲ禁シ、タタソノ寺ノ規式ニシタカヒテ、行ヒ候ヘシ、規式ト申ハ、寺ニサタメラキタル、一日一夜ノ御振舞ヲ申候、一日一夜ヲ、スコシモ佛祖ノオキテニタカハスシテ、行シモテユキ候ヘハ、一年二年一生モ、タタ一日一夜ノ規式ニテ候ナリ、

一日ノ始ハ寅ノ時ナリ、鼓鐘ヲキク時、オキテ袈裟ヲカケ坐シテ卯ノ時ノ半マテ御座候ヘシ、ソレカアマリニ長クオホシメシサフラハハ、寅ノ時ノ半ヨリ、點ヲ打セタマヒテ、卯ノ時半マテ御座候ヘシ、寅ノ時ハ生死ノ業ナクシテ佛祖ニテ御ワタリ候、卯ノ時ノ末ニ御粥ノ作法修シタマヒサフラフ時ハ、坐禪ノ御心ヲハステサセタマフヘシ、用心ト申ハ、六念ヲ修シ、十利ヲ唱ヘ、粥マイル外ハ何ノ善事ナリトモ、ココロニオモハス、イハンヤアシキ心ヲヤ、粥

ノ時ハ身モココロモ、タタ粥ノ用心ニテ、坐禪モ余ノツトメモ、心ニカケラレマシク候、是ハ粥ノ時節ヲアキラメ、カユノココロヲサトルト申候ナリ、此時佛祖ノココロ、ノコルトコロナク、サトルコトニテ候、辰ノ時イマダ世間モスコシ暗クハ、卯ノ時カト覺ルヤウニ、御ツトメ候ヘシ、誦經ノ用心ト申ハ、坐禪ノ事モ粥ノコトモ、少モ御心ニカケス、タタ手ニ經ヲモチヨミテ、外ノ用心サフラス、是ヲ誦經ヲサトリアキラムルト申ニテ候、コノ時生死ノ業ツキテ、佛祖ノ位ニノヘル時節ナリ、御ツトメノ後スコシ休マセタマヒ候ヘシ、休ム時ノ用心ハ、世間ノイタツラコトヲオモハス、イハス候ナリ、辰ノ時ノ半ヨリ巳ノ時ノ半マテ、一時ハ香ヲモリ、鐘ヲナラシテ、坐禪メサルヘシ、坐禪ノ用心ハ、佛祖ヲモ、世間ノ善惡ヲモナケステテ、ココロニオモフコトナク、ナス事ナキヲ坐禪トハ申候ナリ、マダ是ヲ三昧王三昧トモ申候、ワツカニ坐禪スレハヤカテ佛ノ頂ヲコユル第一ノ行ナリ、生死ノ業ツキテ、佛祖ノ位ニノホルナリ、坐禪過テノチニ、御齋ノ法、修セセタマヒ候マテハ、ヤスミ時ニテ候ナリ、ヤスミ時、ミナ規式ノ候ソ、ヤスミ時ノ用心ハ、年ヒトツモ我ヨリマサリタル人ニハ、佛ニモオトラスウヤマフヘシ、病者ナラン人ヲミテハ、父母ノコトク是ヲ見ルヘシ、マタ高聲シ、世間ノ無益ノコトヲカタル事ナカレ、タタ生死無常ノ出息入息ヲ、マタスコトコロニワスルル時ナク、ソノ過テヤヤモスレハ僧堂ノ牀ニ居テ、坐スルモ又イツル時モ、アユム時モ、シツカニ人ニマシハリテモ、佛法ナラテハフルマハヌヲ、ヒマノ用心ト申候ナリ、午ノ時ノハシメニ、御齋オコナハセタマヒ候ヘシ、齊ノ用心ハ、粥ノ用心ニタカフヘカラス、コノ時生死ノ業ツキテ、佛祖ノ位ナリ、未ノ時ヨリ申ノ時ノ半マテハ、ヒマニテ候ナリ、ソノ用心サキニ申コトク、生死事大無常迅速ヲ御心ニカケテ、何事ヲスルニツケテモ、イタツラニ日ヲクラスコトヲナケキ、オホシメサルヘシ、コレ未ノ時ノ用心ト申候ナリ、生死ノ業ナク、佛祖ノ位ニ候ナリ、申ノ時ノ半ヨリ酉ノ時ノ半マテ、坐禪ニテ候ナリ、用心ハサキノ如シ、コノ時、生死ノ業ツキ、身心佛祖ニテ

候ナリ、酉ノ時ノ半ヨリ、アルヒハ放參ノ經ヲモ略シ、戌ノ時ノ初マテ、タタヒマニテ候ナリ、此日ノハヤク過ヌル事ヲオシミ、無常ノ時ヲマタスコトヲ、觀スル用心ノ外ハ、何事モオホシメサレマシク候、コノ時身心トモニ佛祖ニテ候、戌ノ時一時ハ、坐禪ナリ、用心サキノコトシ、コノ時、生死ノ業ツキ、身心佛祖ニテ候、亥ノ時ヒマナリ、ヒマトユルシ候ヘトモ、其ココロニマカセテ坐スヘキ人ハ臥シ、マタ寮ヘカエリテ、佛法ノ物カタリシテ、心ヤスクナクサマセタマフナトノ事、モトモ本意ニテ候、マタ坐サセタマフコトハ、申ニオヨハス、シツカニスヘキ御事ニテ候ヘシ、マタ寮ニカエリフシタマヒ候ニモ、ミナ佛ノフシタマフ御姿ニテ候ヘシ、坐禪誦經ニスコシモヲトリトオホシメサレマシク候、佛ノ臥サセタマフ御姿トモホスハ右ノ脇ヲ下ニシテ、コロモノ帶ヲトカスシテ、寢ルヨリ外ニ、佛法ノ事ナリトモ、心ニカケス、イハンヤ生死ノ心ヲヤ、コノ時、生死ノ業ツキテ、身心タタ佛祖ニテ候、子ノ時ハ、釋尊ノオシヘノコトク、子ニフシ寅ニオクルト、マコトニフスヘキ時ニテ候、坐サセタマヒ候コトモ、クルシカルマシク候、マコトニ草菴夜闌ニシテ耿耿タル天ノ燈ノ影ニ蕭々ナルトキ、御衾ヒキカツキテ、坐サセタマヒ候ラハンハ、世ニアラマホシキ御事ニテ候、フサセタマヒ候トキモ、佛ニタカハスコトニテ候ナリ、此時生死ノ業ツキテ、フシタル身心トモニ佛ニテ候ナリ、是子ノ時ヲイタツラニオクラストハ申候ナリ、丑ノ時モ用心オナシク、身心トモニ佛ニテ候ナリ、コレヲ丑ノ時ヲ、イタツラニオクラスト申候、サキノコトク坐スルモ臥スルモ、少シモタカハヌ佛ニテ候、コレ丑ノ時ノ用心正シクテ、生死ノ業ツキテ、身心佛ナリト申候ナリ、マタ、オキフシ、タタサトリトモ申候、坐禪ノツトメハカリ、深切マコトアリテ、ヒマノ時ハイタツラナリト、オホシメシ候ハ、キハメタル用心ノタカフ事ニテ候、

寅ノ時ヨリハシメ、丑ノ時ノ終マテ、一日一夜ヲ過ルニ、佛祖ノ行持ノコトク、タカフ時ナク候、一日一夜ヲ佛祖

ノ行持ノコトクタクカハスシモテユキ候ヘハ、二十年三十年モ、ヲヨヒ一生モ、コノ一日一夜ニテ候ナリ、サレトモ我身ヲワスレテ、一度三寶ノ願海ニ入テ後ハ、佛祖ヲヨヒ善智識ノヲシヘニタカハネハ、身モ心モトモニ、佛ニテ候、生死ノ業立地ニツキ、父母ノ恩、一時ニ報シ候ナリ、佛ハ多生曠劫ニ修行スルト、トカセタマフ、タタ一日一夜ノ行持ニテ候ナリ、タタシ寺ヲ出スシテ、在家ニ一日モ居メテ申候ナリ、シカアレハ行持ハ佛祖ノ王三昧ナリ、今生ニ佛ナラントマコトニオホシメサレサフラハハ、タタ行持ニテ候ナリ、十二時法語終、

無 相 偈 (傳大士)

夜夜抱佛眠、朝朝還共起、行住鎮相隨、坐臥同居止、
分毫不相離、如身影相似、欲知佛何在、只這語聲是、

永平假名清規撰輯の后に

江 渡 秋 嶺

永平假名清規といふのは、私が道元禪師の正法眼藏から前録の四篇を撰輯したものに勝手に名づけた名前である、然し、勝手に名づけたとはいふものの實は必らずしも勝手だとばかりは思ふて居ない、道元禪師に漢文の永平大清規のあることは誰れしもの知つて居るところである、それで、それに似通ふたものの假名書きの正法眼藏から集めた、これが一通りの名前の由来である。

然し、私の心持ちはそれだけではない。

一體、禪宗、——禪宗といふものはあるべき筈のものでないと思ふて居るが、ソシテ、あるべき筈のものでないものが何んだかあるやうになつたからヘンな墮落したものになつて仕舞つたと私は思ふて居るが、それは兎に角として、通壁に従つて假りにこういつておく、——は、佛敎が單なる敎學でない中にも特に單なる敎相ではなく、又、敎相では知り得ない境地の人と人との證契、相承である、デ、若し禪を理會するといふ言葉が用ゐられ得るならば、それに最も大切なことは、先づ何よりもその禪家の實地の家風を知ることである、その家風を先づ知らずして如何に多くのそれ等の言葉のはしを知つたからとて、それは畢竟言葉のあや以外には何ものも知らないといふことである、今、道元禪師の家風は、その家風を貫いて居る大黒柱は、永平大清規である、その十二時の辨道法である、ソシテ、古佛五十年の生涯、この家風の建立からして或は修行の用心を説き、或はその儀則を語り、或はその宗旨を話し、理の卷となり、事の卷となり、綿密平展、横説堅説、老婆親切、至らざるなしと雖も而も始中終究竟するところは未だ嘗て清規の家風を出でないのである、然るに、世間談禪の徒、深くもこの卷舒を知らず、又省みず、一向に眼藏を紙

弄して未得に得たるものが多い、いかでか一生を空過すとも道元の正宗を知らんやだ、私はいつもこういふ人に會ふ毎に、この人はチツトも道元禪師はわかつて居らない人だと思ふ、豈に獨り道元禪師とのみいはんや、道に於て天地懸隔、白雲萬里、茲に於て、當に眞に、實地にその家風に參すること三五年、その明教に照心する百回、而して後に初めて與に正法は談すべきなのである。

すべてドンナ人の書いたものでも、それ相當の讀み方があるべきものだ、それを無茶苦茶に讀んだではどうにもならぬ、殊に道元禪師のもの如き、そうどうなりかうなり讀んだところで、群盲の象を摸するよりも尙ほわかり得べからざるものだ、然し、その指針さいどうにか間違はなかつたら、道元禪師のものは、一言一句にも全體を現する書き方であれば、既に一方に家風の頂上眼を具し得たものには、或は案外、一絲萬絲をひき得るやうにたやしいものだかも知れない、而もそれだけ、無眼子には益々糸をこんからかせる同一因になるでもあらう、こゝが最もわきまへねばならぬところであると思ふ。更らにこれを想ふ。昔者、黄檗在南泉茶堂内坐、南泉問黄檗、定慧等學、明見佛性、此理如何、黄檗曰、十二時中不依倚一物始得、佛性は十二時中不依倚一物なり、經晝夜の不依倚一物の使は不染汗の行佛威儀なり、不染汗の聲色外の行佛威儀は佛祖屋裏の家常茶飯の作法なり、この作法を外にして又佛性あるべからず、然らば即ち、これ豈に、禪といはず、禪宗といはず、直下に又私共の日々の行履であり、行履であるべきであり、行履の上に承當すべきものではなからうか、寅具戌昏、日中にして祇管作務す、宗はこの外にあらず、私共の家風も亦この外にあらず。さもあらばあれ、執事元。

永平假名清規を撰輯して大方に勸むる所以、いさ、かしるしてその後に附す。(無邪思野、農乘少室にて)
是迷、如是の作理會は亦た早く是れ不是了、

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月十八日發行

【貳拾錢】

東京市杉並區上高井戸三丁目

農乘少室

編輯兼發行者 江 渡 秋 嶺

東京市世田谷區北澤五丁目七一〇

印刷所 使命社印刷所

青森縣三戸郡五戸町野月

發行所 抱 茗 庵
(菊池孝一 耶)

第二輯豫告

永平假名學道用心卷

終

